

推薦文

瀬川久志先生は、東海学園大学が経営学部の一学部からスタートした、その最初から就任していただいた先生です。長らく地域経済学の研究で実績を積み、近年は風力発電と環境問題という視点で全国の風力発電所をくまなく回られました。フィールドワークを重視し実際に現地で考える、ということを大切にされてきた研究者で、博士の学位も「環境マネジメント」で取得されました。

先生が昨年出された『母』という書物も、今回の法然上人の少青年期の著書にも共通していることがあります。それは、若き法然上人の母への思慕と、母御論です。これは学園の校是「共生き」そのものと言えます。すでに十冊以上の著書や小説を出しておられますが、その優しさのある文章力には驚嘆の念を抱きます。

本書は法然上人の若き時代に光を当てた書ということが出来ます。というのは母、秦氏についての論旨に注目していただきたい。岡山県津山市出身の先生が文献資料はいくまでもなく、精通された地理と現地主義という先生の研究方法を存分に発揮された著書です。誕生寺や那岐山菩提寺には何回足を運ばれたことでしょうか。

『法然上人絵伝』（勅伝、国宝、知恩院蔵）の空白部分や、「母のもとに帰ることはなかった」などとする浄土宗史への疑問など貴重な論考であると思います。表題に「朱」という字を使われました。秦氏の錦織のまつ赤な朱色が先生の脳裏にあったか、あるいは三国連太郎の『白い道』の白に対抗された色かと私は秘かに考えています。

東海学園大学 学監

同共生文化研究所 所長 田中祥雄

二〇一八年 四月二六日

はじめに

筆者は、これまで、以下の内容の仏教社会（福祉）事業の研究（下記論文等1～4）を行ってきたが、「法然上人生誕の地美作国に関する研究」（下記著作6）において、法然の幼少・青年期における、同地社会経済・政治構造と上人の情緒形成の原型を探り、そのことが、いかに上人の専修念仏・平等往生へつながっていったかに関して研究を行った。本書は、その続編であり法然上人の伝記『法然上人行状絵図』が、色彩感覚を取り入れた文学作品でもあるという解釈から、文芸のスタイルで書き下ろした研究成果である。色彩表現を文芸等と結びつける研究は、下記英文論文（Study note）において、試みている。

以上のように、本書は『法然上人生誕の地美作国に関する研究』を踏まえ、さらに、平成二八年度に、本学の共生文化研究所において行った、勢至丸が辿ったであろう、現誕生寺から菩提寺への道、勢至丸一四歳で京へ上った美作街道と、高橋良和によって発見され『浄土』に掲載された「佐用の腰掛け石」の実地の調査、さらに、菩提寺の北に聳える霊山那岐山に関する研究を踏まえ、書き下ろしたものである。研究において美作国・法然上人の出自等に関する古文書、学術研究、地域の郷土史研究から類推される、法然上人の幼少・青年期における実像は、旧著で述べたように、霧の中に浮かんで消える、いわば虚像であるかもしれない。今後の研究のために、あえて冒険を冒して本書を上程するものである。

本書において取り上げた、法然上人の幼少・青年期における情緒形成で後年に及んだ具体的要因は、次のような内容であると考えた。すなわち、法然上人幼少・青年期における、美作国の経済・政治・社会構造・地縁・血縁関係（共同体）が、法然上人の情緒形成、思想の端緒形成に果たした縁因の抽出を行い次の項目について類推を行った。

- ア 観覧上人の下での指導——母・秦氏亡き後、叔母が嫁いだ菅原家の下での庇護——
- イ 母の出自・錦織集落の産業構造
- ウ 美作国・国府の支配下にある勝間田郡衙
- エ 菩提寺周辺・勝田郡の産業——馬桑まぐわについて——
- オ 背景にある日本創建の地 霊山・那岐山と情緒形成——母なるものから受けた関係性の形成と自立
- カ 法然の道——菩提寺への道・京への道（上人の腰掛石）・自立と共同体への紐帯——
- キ 専修念仏への道（共生と関係性の形成）

本書「法然上人誕生の地に吹く朱色の風」のフィクションとしての、したがってまた色彩表現を取り入れた内容の着眼点は、次のイ〜ホである。

- イ 「行状絵図」における色彩表現——奇瑞・和歌・夢・炎
- ロ 五つの朱色——煩惱の炎（明石定明による夜襲の炎）・西方の浄土の朱・踏鞴たたら製鉄の残滓ざんさい（公害）・赤気の朱・念仏への情熱の炎
- ハ 萌黄色（高級絹織物）との対比
- ニ 革新思想との連携
- ホ 律令体制崩壊期の特殊過渡期的葛藤

本書は、筆者の東海学園大学における、「ともいき」の精神を踏まえた教育実践の書としての意味も持つものであり、田中学監から「法然上人のともいきと本学の教学理念」なる推薦文をいただき掲載した。文芸書のスタイルを

とった理由の一つは、本文でもたびたび引用したように三国連太郎の『白い道』に触発されたことと、『法然上人絵伝』（現代語訳）が、どちらかというとき文芸書の体裁を持つていて、学術書の体裁にこだわると表現しきれない空隙を埋めるために、経済史的な考察を踏まえて、推論を最大限に引き出すためである。法然上人に学ぶことの意味は、それ自体で完結するものではなく、上人の思想を現代に生かすことである。現代は末法の世である。私たちは、末法の世の経世済民の学を考究し実践しなければならぬ。法然が憂えた時代は、現代に生きる私たちにとっても再現すべきそれである。宇宙物理学のなかで最も成功していると言われる超弦理論をアナロジーとして、時空移動の手段に使ったのはその対比を鮮明にするためである。とはいえ、戦後の混乱期を経て一時期を席卷した新左翼運動と法然上人の思想の革新性を対比する方法を使ったのは、筆者自身の経験を踏まえた個人的なものである。

かかる表現方法は、法然上人にとって不遜なことかもしれない。本文中、主要なアクターである仲村輝彦の授業風景が描かれているが、その意図の可否は読者諸兄の判断を待ちたい。ディテクティブの要素を取り入れたことについては「あとがき」で記したい。また法然の時代の会話描写は、できるだけ古文の体裁を使った。とはいえ、古語に不案内な筆者が作った会話体が、平安後期のそれからは、正確さにおいて程遠いものであることをお断りしたい。古文特有の名詞等について筆者が理解しうる限りで、本文中に*を付して、巻末に語彙の説明をつけておいた。

- 1 拙稿「岡山県美作地域・自修会による仏教福祉事業に関する研究」『東海学園大学研究紀要 社会科学研究編（二九）』二〇一四年三月
- 2 拙著『地域福祉の源流を築いた仏教者たち』（KDP出版）二〇一四年一月
- 3 拙稿「明治・大正・昭和の初期に仏教を中心として取り組まれた社会福祉事業に関する歴史的研究（上）——共生理念との関連で——」（三宅章介と共著）、『共生文化研究』（創刊号）二〇一六年三月
- 4 拙稿「明治・大正・昭和の初期に仏教を中心として取り組まれた社会福祉事業に関する歴史的研究（下）——共生理念との関連で——」（三宅章介と共著）、『共生文化研究（一）』、二〇一七年三月

- 5 The Middle Ages and Modern Windmills as Landscape in Literature — a trial study to integrate social science's environmental issues with color systems, music and pictures (movies) — 『東海学園大学研究紀要…社会科学研究編』(2)『二〇一七年三月、研究ノート』
- 6 『法然上人生涯の地美作国に関する研究』 KDP出版、二〇一七年六月

謝 辞

本書を纏めるにあたり、実に多くの方々からお世話になったことについてふれておかなくてはならない。まず、東海学園大学元学長・現理事長の袖山榮真先生からは、仏教社会事業の成果をまとめた『青空が輝くとき』（後掲参考文献9）に対し、親切なる書評をお送りいただいた。大正から昭和にかけての美作仏教自修会による福祉の取り組みを題材にした書物であるが、先生の「ともいき財団」の責任者としての取り組みからご教示いただいたことが、背中を押していただくことになり、本書に繋がった。袖山先生とは、田中学監や三宅教授とともに、何度も美作地方の調査に出かけ、その都度有益な助言をいただいた。東海学園大学学監の田中祥雄先生にも、袖山先生と並んで、筆者に不案内な浄土教学上のアドバイスをいただき、本書の行間に生かされている。本書の冒頭の推薦文は、筆者のたつてのお願いに快く書き下ろしていただいたものである。感謝したい。東海学園大学共生文化研究所は、本学の開学時から設置されてはいたのであるが、三年前の二〇一五年度から、本格的に研究活動を開始した。本研究所の元所長、神谷正義先生には美作実地調査に何度も同行いただき、二〇一七年度には、二回にわたり法然上人が歩いたであろう道をともし行脚した。神谷先生からいただいたアドバイスがなければ、本書は到底書くことはできなかった。

東海学園大学経営学部名誉教授三宅章介先生にも、特別な謝辞を述べなければならぬ。三宅先生は、キャリア教育の専門家であり、当該分野で博士の学位を取得されている。本書は、中等・高等教育の在り方にも拙劣ながら言及している。都合一〇数回に及ぶ三宅先生との実地調査・踏査とアドバイスがなければ、また本書は成立していない。順番が後になり失礼ではあるが、誕生寺漆間徳然住職からは、同寺所蔵の資料に基づき、法然の出自や父母のことに ついて有益かつ斬新なご意見をいただいた。脚注に明記すべきところではあるが、表現は筆者の責任になることと判

断し、あえて住職の意見は明記しなかつた失礼の段はお詫びしたい。また、本書文中でも取り上げた、菩提寺の麓にある「馬桑」の地名に関して、その植物としての薬用の効能について、スポーツ健康科学部の糸魚川政孝教授から、専門的観点から貴重な資料の提供をいただいた。本書で、薬学上の知見から、法然上人の時代の地域産業の一端に迫ることができたのは、糸魚川教授の協力を負うものである。

本書の成立は、仏教社会事業の調査研究を含めると、足掛け七年にわたり実に三〇数回に及ぶ現地調査・踏査によつて可能となつた。本書に限定すると、奈義町観光協会、奈義町立図書館、佐用町教育委員会、同観光協会、佐用町立図書館、同観光協会、津山市教育委員会のスタッフの皆さん、またお一人ずつ名前前は挙げないが郷土史家の皆さんからいただいた資料やアドバイスが、本書の至るところに生かされている。その一つひとつの出版を明記していない点もお許し願いたい。本書は、奥付にも記したように、二〇一七年度の本学助成金による出版である。出版にあたり御尽力いただいた、学部長の古賀智敏教授及び総務課スタッフに対しても謝辞を述べたい。また二〇一七年度の「共生文化研究所」の年末の研究会では、研究員の皆さんから、貴重なアドバイスをいただいた。記して謝意を述べたい。

平成三〇年四月一〇日

法然上人 赤氣の果てに
― 誕生の地に吹く朱色の風 ―

目次

推薦文	i
はじめに	ii
謝辞	vi
序章——法然房源空	3
初冬の美作道	4	
時代の端境期	6	
法然房源空	7	
記憶の欠片	8	
第一章——峠越え	11
佐用の腰掛け石	12	
関門海峡の海流	14	
霊山那岐山と菩提寺	17	
棚田の白い布切れ	20	
棚田の検証	22	
五つの朱色	24	

魂の救済	26
朱色の夕焼け	28
追憶の授業 〈一〉	末世の時代の経済学
追憶の授業 〈二〉	経済の扉を開く
ハイパス・ペース	33
神奈川県警	36
時空の亀裂	41
悪魔の化身・乞食聖	44
時空移動	45
白拍子 <small>しろびょうし</small>	48
源空のもてなし	50
第二章 —— 勝田郡衛	55
夕月という女	56
官設市場	57
捜査会議	60
阿只女という女	63
馬桑川	65
電磁インパルスからの脱出	67

	日本の伝統色	69	
	追憶の授業〈三〉	チャップリンのモダンタイムス	73
	追憶の授業〈四〉	労働の搾取	75
	追憶の経済学〈五〉	『資本論』が分析した古典的な資本市場	78
第三章	漆問家の再建	81	
	蛇塚の菩提寺	82	
	漆問家の再興	84	
	追憶の授業〈六〉	資本主義と社会主義	87
	二編の論文	89	
	緑のUSBメモリ	92	
	復讐の炎	94	
	夜襲事件の引き金	95	
	夕月の願い	97	
	古曾女の墓標	99	
第四章	論文の解読	103	
	湯玉の真佐子	104	
	引き裂かれた真実	106	

女の影を追え	107
追憶の授業（七）	110
捜査概要	114
那岐山麓殺人事件	115
シャトー・カノン	118
天蚕 <small>てんさん</small> と高級絹織物	119
五つの朱色	121
第五章 —— 第二の殺人事件	125
労働とは何ぞや	126
赤の心理効果	128
女性専用マンション	131
暁海聡教授の過去	132
女記者たちの活躍	136
馬桑を探せ	140
居酒屋・萌黄	143
霊山那岐	146
時国の死と寺尾准教授	148
法然のシンボルカラー	149

第六章 —— 盗用論文

ボトムアップ思考	153
母の残した遺産	157
赤気を呼ぶ篠笛	160
製鉄を巡る利権（地方豪族の経済的利権）	162
貴布 <small>きふ</small> 弥 <small>ね</small> 神社と塚山遺跡	165
美咲町金堀	166
働くものは皆平等往生	167
膠着空間	172
追憶の授業へ八〇ともいきの経済	173
悪夢の日記帳	176
時空のカーテン	181
革労協内ゲバ事件	182
暁海教授の動揺	188
超弦時空のカーテン	194
最先端時空移動シミュレーター	196
梅の花の源空と夕月	199
源空の再起	202

源空うろたえる	204
末法の世の兆候・赤気	207
追憶の授業〈九〉 商品	208
第七章——萌黄の女の死	213
再び萌黄の女	214
事件の急展開	215
追憶の経済学〈一〇〉 剰余価値の源泉	220
追憶の授業〈一一〉 自由競争から独占資本主義へそして国家独占へ	223
終章——再び腰掛け石へ	227
源空の旅立ち	228
キャンパスのカフェ	231
追憶の授業〈一二〉 国家独占資本主義	232
追憶の授業〈一三〉 国家の形態でのブルジョワ社会の総括	234
馬桑の故郷	237
決死の逃走	239
別れの腰掛け石	242
那岐山にて	243

事故現場に吹く緑の風

247

あとがき

..... 249

古語解説

..... 251

参考文献・論文・資料

..... 252

追憶の授業・参考文献

..... 253

法然上人 赤氣の果てに

― 誕生の地に吹く朱色の風 ―

序章——法然房源空

初冬の美作道

法然房源空という男は、人生四〇の峠を越えた、迷える修行僧であった。師匠から勧められた教義に関する書を読めど、意味解釈の真髓を知らず、いまだ悟りの境地に至ったという自覚を得ず、いわんや、その手がかりさえも掴めないでいた。湿気の多い房に籠ってばかりいては健康にも悪い。初冬の湿った風が、行く道に積もった枯葉を、かさかさ舞い上がらせ、行く手を阻んでいた。秋から冬へと向う季節の移り変わりもたらず荒涼たる景色は、源空の乾いた心の景色そのものであった。何もかも投げ出したくなる、いっそのこと、このひび割れた大地で、この身が朽ち果てるのを待とうかとさえ思うほどであった。足取りは重かった。京から川を下り海路で播磨の港に着き、陸路をはるばるやってきたのだった。播磨国府で美作国へ入る許可をもらい、佐用の郡衙の馬小屋で一夜を過ごし、道中の食料を調達して、師匠の書状によつて、わずかばかりの路銀と乾物を支給された。これだけのものがあれば、勝間田郡まではあと一息、日の暮れるうちには、着くことができるだろう。

「我は、何のためにこれまで生きてきけん。もう、四〇歳を過ぐといへど、何一つ分かつてはあらず」

源空は、冷たくなった手のひらをこすり合わせながら、自問自答した。編隊を組んで、源空の進む方角へ飛ぶ雁の群れが、源空の目には、無性に憎く映った。唐松の林が、ひゆるる、ひゆるると風を受けて鳴っている。源空の思考の回路は停まり、ただ進む方角へ足を向けることだけが、その場の目的だった。美作国へ入ること、そして懐かしい親類縁者らに会うことによつて得られる喜びは、その先に横たわっている儂い夢であり、うつろな心を満たしてくれる僅かばかりの希望であった。ただ足を動かさなければ、その夢がかなわない。

「この身が果つる前に、せめて一度のみ会ひたし」

源空は、うつろな胸の中につぶやいた。普段、鬱蒼うつそうとした樹木に囲まれた房に閉じこもり、經典との格闘に明け暮れた生活を支える足はひ弱く、途中何度も血豆をつぶし、それがまたつぶれ、両足の親指の先は、大きなたんこぶになっていた。これまで何度も通った道とはいえ、既成の教義に飽き足らず、それらを否定するに至ったわが脳裏と身は、阿鼻地獄への道を転落するとの、同僚たちの批判が身にしみた。この道は、まさに阿鼻地獄へ続く道とさえ思われた。

阿鼻地獄は八大地獄の一つで、無間地獄ともいう。想像するだに恐ろしい最悪の地獄で、父を殺すなどの五逆罪で、正しい教えを非難攻撃する罪を犯した人間の赴く地獄とされ、絶え間なく苦痛を受け、それを逃れることができないとされる。源空はわが身の罪悪によって、阿鼻地獄への道を歩んでいるのだと思った。今日も、佐用の郡衙を出る直前、激しい胃の痛みに見舞われ、やっとの思いで、郡衙を後にしたのだった。これから先の道中、またいつ痛みが襲ってくるか分からない。

「仏よ、なんぢに情けといふものがあらば、どうぞ我を救ひ給え」

源空は、道端の枯れ草につぶやいた。

この季節になつては、行きかう人の影さえない。みな、めぐり来る冬を乗り切るための準備に余念がなかった。いな、鳥や獣さえ深い眠りにつこうとしている。佐用の郡衙を出てから半時も立っただろうか、太陽が行く手の方向、つまり美作国の空へ傾き始めていた。峠を越せば美作国へ入る。

「西へ向つて家路を急ぐ雁よ。我の生くる知恵を授けてくれずや」

源空の言葉は、むなしく北風にかき消された。源空は、自分が生まれてきたことをすら呪っていた。

法然上人、つまり法然房源空が美作の地に生まれたのは一一三三年、七九歳の生涯を閉じたのが一二二年のことであった。その七九年の生涯は、まさに怒濤の波が時代を洗うそれであり、中央にあつては、武士が台頭し、平家の全盛時代から壇ノ浦に海の藻屑と散った時代を含んでいる。源空がわが道に光明あれと葛藤を続けていた平安時代は、歴史教科書によれば、三つの時期区分に分けて説明される。前期は、天皇家と藤原氏の競合共存の時代で、中国とつき合いがあつた時代である。源空とも縁のある、後の世になつて学問の神様で知られる菅原道真の左遷まで（七九四〜九〇一年）の時代。中期は藤原氏が政治を独占し、また、地方武士が台頭してくる時代で、後三条天皇即位まで（九〇一〜一〇六八年）である。しかし、この時期には、源空―歴史書『作陽誌』に記されるところでは、幼名を空爾という―は、まだ生まれていない。後期は、院政が行われ、天皇家と結びついた武士が中央の政治にかかわりを持った時代で、平家滅亡まで（一〇六八〜一一八五年）。平家の滅亡は、源空が五二歳の時であつた。

本書にも登場する美作菅家党の先祖・菅原道真（八四五〜九〇三年）は、日本の平安時代の貴族で、学者、詩人、政治家として有名である。宇多天皇に重用されて、寛平の治を支えた一人であり、醍醐朝では、右大臣にまで昇つた。しかし、左大臣の藤原時平に讒訴ごんすされ、大宰府へ左遷されて現地で没した。死後、天変地異が多発したことから、朝廷に崇りをなしたとされ、天満天神として信仰の対象となる。

「海ならず 湛へる水の底までに 清き心は 月ぞ照らさむ」（新古今和歌集）は、大宰府へ左遷の途上、備前国児島郡八浜で詠まれた歌で有名。「東風吹かばにほひおこせよ 梅の花 主なしとて 春な忘れそ」（『拾遺和歌集』）と詠んだ歌も有名である。菅原家と美作国との縁は、拙著『法然上人生誕の地 美作国に関する研究』一七頁に説明した。

道真の末裔と、法然の母の妹が婚姻関係にあったことを、読者は御存知であろうか。

法然房源空

法然上人は、一一四五（天養二）年、一三歳の時——年齢に関しては本書ではいわゆる「数え」を用いる——比叡山延暦寺に登り源光に師事した。源光は、源空に対し自分で教えることを教え終わり、一一四七（久安三）年、源空一五歳で今度は皇円の下で得度し、一八歳で皇円のもとを辞し、比叡山黒谷別所に移り、叡空を師として修行した。叡空からもたいそう評価され、一八歳で法然房という房号を、源光と叡空から一字ずつとって源空という名削を授かった。したがって、法然の僧としての正式な名は「法然房源空」である。本書では、法然上人が法然房源空と呼ばれるようになった、数えの一八歳からを源空と呼び、それまでの幼・少年時代を『作陽誌』に見える空孀の女偏を取った空爾くわじという幼名で用いる。『作陽誌（中巻）』には法然上人の出自が述べられており、口語文に直すと次のようになる。

「空は長承癸丑歲福岡北庄栃社邑に産る。栃社は地名にして一に曰く、空孀の母は古曾女を名とする。栃と刀自とは倭訓相通ず、刀自は女孀の通称なるが故に栃社という。もつて山号となすは本に酬ゆゆえんなり。未だいづれが是なるかを知らざるなり」（四二四・五頁）。

法然上人の経歴については、巻末参考文献「22 源空聖人私日記」に詳しい。また同「21 井川定慶『法然上人伝全集 法然上人絵伝の研究』」には、全生涯を通じた上人の年表が作られているので参照するとよい。源空は、幼いころ父親から聞かされた、美作国の東部に勢力を張った藤原家の祖先・道真のことを思い出した。彼の母親の古曾こそめ女の妹・阿只あだめ女は、この菅原家に嫁いだのであった。阿只女の夫は菅原尚忠なかつたといった。美作国の押領使として官位を得た菅原

実兼さねかねの子が尚忠であった。押領使とは、日本の律令制下の令外官の一つで、警察・軍事的官職をいうとされる。それは、八世紀の防人さきもりの記述にはじめて見られるといわれ、国司や郡司の中でも武芸に長けた者が兼任し、現代でいう地方警察のような、一国内の治安の維持にあたった職であった。東海道・東山道などの、道という広範囲に渡つての軍事を担当した者もあったが、源空の父の時国や美作の国の菅原家は、地域に密着した警察任務であつたと思われる。

源空は、後の時代に菅家党と称されるようになった、経済基盤に恵まれた菅原家の尚忠の庇護を受けて成長したのであつた。なぜならば、空爾が学問のためにのぼつた菩提寺周辺は、藤原家の経済的支配地であり、何よりも、空爾の母親の古曾女の妹が嫁いだ、有力武士団であつたからである。しかしながら、この地侍の経済基盤の詳細は、同じ美作国の西部に属する、空爾の父親及び母親の経済基盤に比べて詳細は不明のままである。

記憶の欠片

仲村輝彦は、東京の大学から割愛請求が来たのを機に、思い切つて職場を東京に変えることにした。それまでの職場が特に気に入らないとか、給料やその他の条件がよくないとか、そういうことではなかったけれど、やはり、彼が学問を志し、研鑽を重ねて、その入り口を潜りぬけた東京は、彼にとつての学問の故郷であつた。そこで育んだ問題意識と研究テーマに関する解明の糸口は、自慢できるものではなかったが、東京という政治行政・経済の集積の中にあつた。このまま地方の大学で過ごし、そこに骨を埋めるつもりはなかった。

大学院を二九歳で修了——正確には単位取得退学という——し、地方の大学で終身雇用の職を得て、すでに三〇年を超える歳月が経過していた。これからの研究のすすめ方に関して、再考するのは当然のことであり、請われて転籍することを良縁と考え、懐かしい東京へ戻つてきた。

居所も大学時代を過ごした世田谷区を選んで、やがてまた帰郷することもあるのかと、売りに出しやすいマンションを購入して、旧居は妻が学習塾をしながら守るといので任せることにして、必要最低限の家財道具だけを持ち込んで、新しい生活を始めた。家族とは単身赴任、二重生活を余儀なくされたが、週末と休暇には、旧居へ帰るので、妻は「亭主元気で留守がいい」などと言って、「女子会」を結構楽しんでいるようだった。

一方、仲村輝彦の幼なじみの真佐子——といっても、知り合ったのは、仲村が大学生で真佐子が中学二年生の時、その後、訳あって二人は離ればなれになり、つい最近、偶然にも山陰の海岸で再会した——は、真佐子の息子夫婦に待望の男の子の孫が生まれ、一人歩きできるまで成長したことから、胸の隙間に仲村のことが浮かんでは消えして、落ち着かない毎日を送っていたところ、「東京の大学へ替わります。落ち着いたら連絡します」とだけ記した絵葉書を受け取り、くすぶっていた胸の中の綿に火がついてしまった。しかし、特別な感情やつき合いがあるわけではなく、言ってみれば、同じ同郷の「同窓生」であるから、気楽に行ったり来たりしていたのであった。

絵葉書にあった大学の住所宛に、封書で手紙を送った。

「何があつたか知りませんが、あなた、私から逃げるつもりね。許しませんからね」

と挑発的な言葉を記した。その後、仲村からショートメールが来た。

「仕事の都合です。でも、東京に一度遊びにいらっしやい」

という文言に、

「明日にでも行くわ。首を洗って待ってらっしやい」

と返した。

真佐子は、二十歳過ぎのとき、勤め先の会社が企画したバス旅行で山間を通行中、何者かの仕業で、バスが中国山地の峠に差し掛かったところを爆破され、深い谷底へ転落、地獄絵巻の中で、体中にやけどを負い、九死に一生を得

たものの、それまでの記憶をすべて失ってしまった。仲村と付き合っていた頃の記憶は、無残にも、赤い炎とともにかき消されてしまった。

運命のなせる仕業か、はたまた超人的な何かによって、仲村と山陰の海岸で偶然巡りあい、仲村を自分にとって何か、かけがえのない存在だと感じたのは、脳の奥深くに壊れないまま残存していた「記憶」の欠片であった。そのとき、仲村が声をかけなかったら、真佐子は仲村のそばを通り過ぎていたに違いない。

この再会は、広い大海原の中に失ったコンタクトレンズを見つけるのに似ていた。真佐子は、バス事故以前に何があったのか、なぜバス爆破事件に巻き込まれたのか、仲村が探し出して教えてくれることを信じて、再び付き合いを始めた。バス事件は、仲村にとって、真佐子と別れたあとの出来事であったので、当時の捜査記録と担当の刑事の記憶以外に頼るものがなかった。真佐子の周囲は、夫を病気で亡くした心の空白を満たすお遊びだと決め付けて、猛烈に反対した。とは言っても、島根県警の捜査では、当時の過激派が仕組んだ事件には間違いはなかったから、このいったん時効になった事件を、仲村とともに追いかける決心をしたのだった。真佐子には、かけがえのない青春時代の記憶を失ったまま人生を終えることは、絶対にできないことだった。自分の青春時代のひとこまを知っている仲村に、すべてを託そうと決心した。そして、最近、横浜で起きた殺人事件を通じて、バス爆破事件の全容解明に、薄日射が射すまでになってきた。この最近の殺人事件を担当した、神奈川県警の夏光一郎警部が、迷宮入りしたバス爆破事件の解明に協力を惜しまないと約束してくれた。真佐子は、孫を膝の上であやしなながら、横浜で起きた殺人事件の初公判の新聞記事を思い出していた。

「この事件と過去のバス爆破事件は、どこかで繋がっているに違いないわ」

真佐子は、孫の頬を撫でながらつぶやいた。孫が、愛らしい笑いで答えた。

第一章——峠越え

佐用の腰掛け石

「源空様、待ちたまへ。お物語があり。とばかり待ちたまへ」

源空の後方から、何人かの住人の声がして、彼に迫ってきた。振り返ると、地元の人と思われるものどもが、数人小走りで追いかけてくるのを認めた。粗末な麻の衣服を身につけている。その群れの中に、源空に見覚えのある者が何人か混じっていた。

「源空様、お伝えしたきが候ふ。しばし、待ちたまへ」

と言つて、源空の背後から近づいてきた。どうやら怪しいものではなさそうだ。顔見知りの男を認めると、

「おお、そなたはいつぞやの。かの時は、大変お世話になりました」

源空は、息を切らせながら近づいてくる人の群れに答えた。そして、道の野辺にある、懐かしい石に腰を下ろした。この石は平らな石で、休憩をするには、格好の場所であり、この先がちょうど美作国に入る最後の峠になっているので、源空は美作国に入るときには、いつもこの石で休息するのだった。偶々居合たまたまさせた人を相手に、また求めに応じて法話をするのだった。土地の者どもは、それを知っていて、追いかけて来たに違いない。源空が好んで休憩した場所は、いつの日か、法然上人の腰掛け石と呼ばれるようになり、今に伝えられている。「地域の住民に法話をした場所」「たびたび生まれ故郷の美作へ帰っていた」などと記録されている。

「源空様、屋敷へお寄り下さらずとは、お人が悪しかし」

「それには、なかなか気を使はすることになって、申し訳なしと思い、失礼しき」

源空は、竹筒に入った水を口に含んで言った。口々に源空の近況を窺う者あり、また、地元の今年の稲の作柄、野

菜や五穀の収穫のことを話し、源空の天気の見込みがあたっていたことに感謝した。

「なんぢ様が指示されしとおり、今年は日照りが続くを予想して、庄を上げて利水に取り組みしおかげに、野菜や五穀を枯らさざりてすみき」

と、長の者が胸の前に手を合わせた。源空は陰陽道おんやうどうの心得があった。基本的なことは、九歳から一四歳までを菩提寺の坊で修行をしていたときに、旅の途中で坊に寝泊りする聖たちから教わったものだった。空爾は、見る物聞く物すべてを、たちまちのうちに理解し習得した。

源空は目を細めて、後方に控えている不具の者に目をやった。彼女は何年か前、源空がこの道を通りかかったときに、高熱の病気に侵されており、土地の者に請われるまま、薬草を施し、その他の治療を試みるもむなしく、両目から光を失ってしまった。しかし彼女は、身を惜しまず必死に看病をしてくれた源空のことを、今もその瞳の中に留めていた。

「源空様」

と言つて、三〇過ぎの瘦せぎすの体を引きすつて源空の前へ進んだ。女の背後には、まっ黒な顔をした男子が、六、七歳であろうか、指を口にくわえて隠れていた。

「おお懐かし。今も元氣にいるか。そなたのことを案じてはありしが、ついぞ書もしたためず、失礼をしにき」と言つて、源空は女の手を取つた。

「源空様、京へ戻るついでには、必ず立ち寄りたまへ。我が覚えし、舞を舞つて、見てたまへたと存ず」と、女は頬に涙して懇願した。源空は胸中複雑な思いに、顔を小さく縦に振つたが、女は、

「きつとなりよ。我もみんなも待ちたればね」

と、源空の手を強く握り締めた。

「源空様」

と、長格の老人が言った。

「先ほど美作国へ向った地侍が申すには、源空様があとより美作国へ向うのに、これを渡しなされ、そして、郡衙にて待ちたてまつりたると伝えよ、といふなりき」

そして、一握りの包みを源空に差し出した。包みは乾燥した竹の皮に包まれていた。地侍は、おそらく美作菅原家の侍で、菅原家の配下の者であろうと推察した。源空が美作国へ向かっているという情報を、佐用の郡衙で聞き及び、食料を託けたのである。菅原家は美作国の押領使を任ぜられていたから、山陽道の支路に当たたる美作街道では顔がきく。美作街道は後の世になって出雲街道と呼ばれるようになり、播磨国姫路を始点として、出雲国の松江に至る街道であった。

西の空で、陽の暮れるのを待っている木々の梢の小鳥たちが、旅人を案じていつせいに鳴いた。源空は暇を告げた。村の者どもは、曲がり道に源空の姿が見えなくなるまで見送り続けた。源空の影が、先ほどからするとやや長くなっていった。源空は見送る者と、これから会うことになるであろう帰りを待つ者との狭間で、方向感覚を失っていた。

関門海峡の海流

真佐子は親友を下関に訪ねた。名を河野といい、下関市の社会福祉協議会で、ケースワーカーとして働いていた。源平壇ノ浦の合戦を記念して整備された公園のベンチで待ち合わせた。血みどろの死闘が繰り広げられた所とは、どうしても思えないような、剥き抜けるような青空と、穏やかな瀬戸内海の海峡が、平安時代の終末の歴史の一こまを